

緯書における黄帝について

著者	中村 璋八
著者別名	NAKAMURA S.
雑誌名	漢文學會々報
巻	14
ページ	19-24
発行年	1953-06-25
URL	http://doi.org/10.15068/00146395

(註二) 「封禪」「獲寶鼎」「迎日推策」「順天地之紀」等 (詳しくは

史記黃帝本紀考にある)

(註三) 重沢俊郎「司馬遷の研究」(周漢思想の研究 p. 282)

(註四) 史実に対する主観的批判は極めて簡単であるが「無驗」「無效」

とか、或は「天子益愈厭方士之怪迂語矣、然羸縻不絶」等の形、又諸方士の盛衰の記述の中に見られるが、封禪書全般の構成は、客観的な記述である。

(註五) 史記著作考(岩村忍訳 p. 112)

(註六) これ等の資料比較は、詳しくは「史記黃帝本紀考」にある。

緯書における黃帝について

中 村 璋 八

(註七) この事について岡崎氏(司馬遷と班固、史林第十七卷三号)は

司馬遷の立場を極めて消極的に認めて居られるが、私は平岡氏(五帝本紀の新研究、支那学、卷八 p. 153)が「周末秦漢の大統一統帝国の意識から生まれた国家史的反省が、以て中華の始祖たるべきものと観せしものであつた」と言ふ資料取扱ひに対する積極的立場を認める。

(註八) 前掲、平岡氏説 (p. 145)

(註九) この点については、紙数の関係にて次の機会にゆづる。

一

緯書は個人の述作ではなく、又或る限定された時代の創作でもなく、その中には戦国以来の九流百家の説が混入している。(一)即ちそれら諸家の經典乃至傳説の一種の解説がまとめられたものではあるが、現存する緯書は、漢以後の文獻が各々の立場で引用した断片的佚文を收輯したもので、それが如何なる性質の解説であるか明確ではない。かゝる緯書を同一資料として扱ふことは危険であり、これを対象とする場合は、一つの全体として見るという假設がなければならぬ。併しそれが緯書と総括される以上、全く不統一な、断片的記事の集合体ではなく、或る時代の、或る共通の意図を持つ集團の人々が、何等かの目的を以て作成したものであり、或る体系を持つと思われ

る。試みに、緯書を検すると、古代帝王の傳説が極めて豊富であること

に氣附く。今それを列挙すると左の如くである。()内は回数を示す
伏羲(36) 燧人(8) 女媧(3) 神農(17) 黃帝(91) 少皞(3)
顓頊(10) 帝嚳(5) 堯(57) 舜(28) 禹(21) 以下略 (二)
これ等は、現存緯書全体において、決して輕視出来ない部分を占めている。特に黃帝に関する傳説は多い。そこで緯書の黃帝を把握することは緯書が、如何なる体系を持ち、如何なる意図によつて作成されたかを知る一つの手懸りとなるのではなからうか。

二

黃帝傳説は、九十一条もの多きに達するが、それを類別すると、左の如くなる。(数字は回数)

(一) 黃帝名軒、北斗黃神之精、母地祇之女附寶、之郊野、大電繞樞斗星耀、感附寶生軒轅。胃文曰黃帝子。(河圖握矩起、御覽七十九引)

(2) 黄帝龍顏、得天庭陽、上法中宿、取象文昌。(春秋元命苞、五行大義卷五引)

(3) 黄帝将興、有黃雀赤頭、立于日旁、帝占曰、黃者土精、赤者火精、爵者賞也。(春秋合誠圖、御覽八百七十二引)

黄帝将興、黃雲升于堂。(春秋私演孔圖、藝文類聚引)

黄帝起、大曠見。(河圖、御覽九百四十七引)

黄帝時麟在園、鸞鳥來儀。(尚書中候、藝文類聚引)

(4) 黄帝遊玄囂雒上、與大司馬容光等臨觀、鳳皇銜圖置帝前、帝再拜受圖。(春秋合誠圖、天地瑞祥志卷十八引)

黄帝東巡至洛、龜書成赤文綠字、以授軒轅。(中候雒師諫、占經一百二十引)

黄帝游洛至翠嬌之泉、龍圖蘭葉朱文授之。(河圖、李嶠雜詠一百二十首注引)

黄帝受圖立五始、元者氣之始。春者四時之始、王者受命之始、正月者政教之始、公即位者一國之始。(春秋元命苞、春秋穀梁傳隱元年疏引)

(5) 聖人興起、不知其姓、當吹律聽聲、以下其姓、黄帝吹律以定姓、是也。(易是類謀、御覽十六引)

(6) 黄帝樂曰咸池。(樂叶圖徵、舞賦注引)

(7) 黄帝受地形、象天文、以制官。(論語誤考・周禮序引)

(8) 黄帝師於風后、風后善於伏羲氏之道、推衍陰陽之事。(春秋內事、後漢書張衡傳引)

(9) 黄帝以德行、蚩尤與黄帝戰(禮斗威儀、周禮肆師疏引)

(10) 黄帝傳十世千五百年。(春秋命歷序、鄭樵通志引)

三皇三正、伏羲建寅、神農建丑、黄帝建子。(禮稽命徵、玉函山房輯佚書引)

(11) 太微宮有五帝座星、蒼帝其名曰靈威仰、赤帝其名曰赤熛怒、白

帝其名曰白招矩、黑帝其名曰汁光紀、黄帝其名曰含枢紐。(春秋文曜鉤、左傳啓蟄而郊疏引)

(12) 其他 断片的資料

三二

右の類別を考察すると、(6)「黄帝樂曰咸池」は、既に呂覽古樂・莊子天下・天運・周礼春官等に、(7)天子としての功德は、左傳昭十七年傳、史記五帝本紀に、(8)風后との關係は、列子黄帝、淮南覽冥、五帝本紀に、(9)蚩尤との戰は、戰国秦策、莊子盜跖に、各々その型が古く存するが、殆ど展開した跡が認められず、緯書は当時既に定着していた古傳説を、そのまま踏襲したと思われる。(10)治世年数歴法等は、緯書の創作と思われるが、黄帝傳説としては、非常に断片的であるので、別の機会に論じ度い。(11)「黄帝其名曰含枢紐」は五帝座星の黄帝である。かくすると、(1) (2) (3) (4) (5) だけが、緯書における黄帝傳説の特異な型として残る。

四

(1)は、黄帝の母が比斗枢星に感じて彼を生んだ、とする傳説であるが、この種の感生帝説(三)は、既に詩經玄鳥、長笄に玄鳥による殷祖の傳説が存する。(尤も毛傳は感生帝説とはしないが)、更に楚辭にも、天問・思美人に玄鳥、離騷に鳳皇による型が見出せる。(鳳皇も玄鳥・即ち燕である)。(四)呂覽音初には、北音の起源を説明した条ではあるが、「燕遺二卵」の記事がある。詩經、楚辭の記載が、感生帝説か、否かは、問題であるが(五)、玄鳥とあるのみで、呂覽に始めて卵となつてゐる。これが感生帝説として形を整えたのは、史記殷本紀の「三人行浴、見玄鳥墮卵、簡狄取吞之、因孕生契。」である(六)。史記には、五帝本紀及び夏本紀に感生帝説はなく、殷本紀に始めて現わ

れている。これに對して、史遷はその贅で、「余以頌次契之事。」と説明している。併し商頌のみを資料としたのでは、かゝる傳説の形成は不可能であり、楚辭・呂覽の記事、又は殷民族が玄鳥を姪姫神として信仰していたこと(七七)等も、考慮した上と思われる。続いて周本紀には、「姜源出野、見巨人蹟、心欣然說、欲踐之、踐之而身動、如孕者、居期而生子」と、后稷の話がある。これは詩経生民に既に整った形があり、それらを資料としたのであろう。秦本紀には、「女脩織、玄鳥隕卵、女脩吞之、生子大業」と、契と殆ど同一の形がある。別の形としては、高祖本紀に、「劉媪嘗息大澤之陂、夢與神遇、是時電雷晦冥、大公往視、則見蛟龍於其上、已而有身、遂產高祖」と、蛟龍による傳説がある。これは如何なる資料に基いたか、明確でないが、新しい傳説と思われる(八)。史記以後は、列女傳、拾遺記等に契の、吳越春秋に后稷の、感生帝説が見られるが、何れも古傳からの展開は認められない。以上の外は、吳越春秋に、「得蕙苴而吞之」と、禹の感生帝説があるのみである。

これに對し、緯書は五十余の感生帝説を有し、その中には、前漢の文獻には存しない形が多数含まれている。これを緯書の帝序によつて配列すると、A表の如くなる。即ち古傳の契の玄鳥卵・后稷の巨人蹟、禹の蕙苴は、そのまゝ、緯書にも存し、高祖の蛟龍は赤龍、赤鳥と変じている。又龍による者は、相生的五德説の火德である神農・堯、大跡は木德である伏羲(九)のみに限定され、これと高祖の蛟龍が火德を示す赤龍・赤鳥(一〇)に移つたことを考え合せると、緯書の感生帝説形成には、漢を火德とする相生的五德が働いていたと思われる。

更に原拠不明の感生帝説を検すると、黄帝の北斗枢星・大虹・朱宣の大星、顓頊の瑤光、舜の大虹、禹の流星等、殆ど星辰、大虹である。この屬性を考えると、北斗枢星は「中宮大帝、其精北極星」(春秋文曜鉤、史記索隱引)と、中央土に配され、大星は「金精」(尙書

A 表

伏羲	大跡・大人迹	木
神農	神龍首	火
黄帝	北斗枢星・大虹	土
朱宣	大星	金
顓頊	瑤光	水
帝嚳	(路史)大跡	木
堯	赤龍	火
舜	大虹	土
禹	流星・蕙苴	金
殷契	玄鳥卵	水
湯	白氣	〃
周後稷	大跡・大人迹	木
文王	長人、大人	〃
秦	(史記)玄鳥卵	潤水
漢祖	赤龍・赤鳥	火
孔子	黑帝	

最も緯書のと云える。

では、星辰は如何なる性質を有したか。緯書作者は「星之為言精」(春秋說題辭、爾雅疏引)「天有五帝、五星為之使」(春秋元命苞、占經十八引)と、精又は天子の使者としている。これと地上の帝との關係は、「象五精之神、天有五帝、集居太微、降神以生聖人、故帝者

帝命驗注、御覽八十二引)とあり、瑤光は「黑」

(春秋運斗枢、靈光殿賦注引)即ち水に配され、

大虹は土に配される枢

星・填星(一一)、(春秋

運斗枢 御覽十四引)と

結合し、又大虹による黄

帝・舜は共に土德、星辰

による朱宣・禹は金德と

なり、全く相生説と符合

する。そこで、緯書の感

生帝説は、古傳の存する

ものはそのまゝ踏襲し、

次にその形を相生的五德

説による同德の帝王に敷

衍し、それ以外は五行に

配当された星辰・大虹等

を以て、緯書作者が創作

した、と推測することが

出来る。それ故、星辰・

大虹による感生帝説こそ

承天立五府。」(尙書帝命驗注)と、説明されている。更に「德合北辰者稱皇、感五帝巫星者稱帝」(中候勅省圖、史記正義引)ともあり、星辰は天意を示すものであつた。

黃帝の北斗枢星による感生帝説は、かくして緯書作者により創作され、それは黃帝が天の黃帝の子であり、生得的に帝王たるの資格を具備していることを、顯示するものである。

五

(2)は黃帝は龍顔にして、身体は星辰を象る、とする傳説である。この龍顔の例は、神農、舜にも見られ、史記高祖本紀には、「隆準而龍顔」とある。これは当時靈獸として定評のあつた龍(一二)と結合せしめることにより、帝王の超人間的性格を、主張したのであろう。又身体が星辰を象つたとする例も、伏羲・顓頊・帝嚳・堯・舜等に存し、何れも五行に配当される星辰に象つてゐる。帝王が天帝の子である以上、当然起る傳説であらう。

六

(3)は、黃帝興起、又は治世の時、黃雀、黃雲、大螾、麟、鸞鳥等が現われた、とする一連の傳説である。これは、「王者德至于地則朱草生、蓂莢孳、嘉禾成、菴蒲生。」(孝經援神契、大戴禮虛弁注引)とある如く、一切の自然現象を政治現象と関連させて解釈し、天子が聖德を以て統治する際には、天はこれを嘉して種々の吉祥を現わす、とする瑞祥である。これも黃帝のみならず、伏羲、神農、堯、舜、禹等の世にも現われている。瑞祥は古代文獻にも屢々見出され、詩經生民、書經益稷、左傳莊公二十二年(一三)の條の鳳皇は、たゞ立派な鳥に過ぎないとしても、禮記禮運、呂覽応同、淮南覽冥、史記五帝本紀、天官書等の鳳皇、麒麟、醜泉、膏露、大螾、大螻、龜、龍、景星

等の出現は、明白に瑞祥であり、このような瑞祥思想は、秦漢を通じ隆盛を極めた(一五)。緯書はこの集大成の如き観がある。それは陳槃氏(二六)が、「原夫符瑞思想、本與五帝德互為因果、有德者必有符、是以知其德。」と、論ずる如く、五帝德説と密接な關係を持ち、各王朝の推移を天の啓示である瑞祥により、正当化しよう、としたものである。

七

瑞祥の特殊な形として、河図洛書を得た傳説があり、黃帝には鳳皇と図、龜と書、竜と図を要素とする三つの類型が存する。又伏羲・堯・舜にも、類似の形が見出せる。この河図洛書も、既に書經顧命・論語子罕、易繫辭(一七)等に現われているが、緯書のそれとは同一ではなかつたようである(一八)。緯書においては、「天之將降嘉瑞也、……図乃見。……帝德之應……書見矣」(易乾鑿度、古経解彙函本)の如く、帝王の德に応じて現われる一種の瑞祥の場合と、「天子亡徴九、聖人起有八符、……河出録、雒出變書」(易是類謀、右同)の如く、聖人・王者の起らうとする前兆、即ち讖記の場合、との二種があつたようである。前者の具体的型としては、春秋運斗枢、舜の条に「図以黃玉為匣、如櫃、長三尺、広八寸、厚一寸、四合而有戸、白玉檢、黃金繩、芝為泥、封雨端、章曰、天帝黃符璽五字、広袤各三寸、深四分、鳥文。」とあり、堯の条にも「天赤帝符璽」等と、帝德を變じて存する。(共御覽八十一引)これは、「天子皆五帝之精、寶各有順序、次第相據起、必有神靈符紀」(春秋演孔図、初學記九引)によつても知られる如く、天の五帝の交代を、各々の精である帝王の啓示する文書であり、常にそれらは鳳皇・龜・龍等を媒介として授けられた。それ故、「五帝出、受図録」(尙書璇璣鈴、沈約安陸王碑注引)「王者常置圖録於旁、以自正」(春秋演孔図、初學記引)となる。後者

には、「夏桀無道、湯當代之」「姫昌蒼帝之子、亡殷者紂也」等の讖が含まれていた。河図と洛書は陳槃氏(一九)が指摘している如く、殆ど差は認められない。

図・書を得た傳説は、黃帝のみではないが、独自のものとして、河図により、「五始」を立てたことがある。これは伏羲が図により八卦を創作したとする傳説(礼含文嘉・五行大義五引)と並び、春秋の書法を黃帝の創作となすことにより、春秋を權威付けようとした緯書作者の試みであろう。この記事は春秋緯のみに見られる。

以上、一般的瑞祥と図書に就いて略述したのであるが、両者の関係は、「天応以鳥獸文章。地応以河図洛書。」(禮含文嘉・易疏引)と、説明している。彼等は、当時隆盛を極めた単純な瑞祥のみでは満足出来ず、更に複雑な、更に決定的な図、書により、帝王の正統受命を、確認たるものとしたのである。

八

黃帝が「吹律以定姓」のことは、如何なる資料によつたか、明白ではないが、国語晋語に「凡黃帝之子二十五宗、其得姓十四人、為十二姓」とあり、又一方、呂覽古樂に「昔黃帝令伶倫作為律」と作器傳説があり、律は十二律である。これに就いて論ずることは、紙数の関係で出来ないが、両者が資料となつて形成されたのではないかと思われる。

九

以上、緯書作者の創作と思われる黃帝傳説の生成過程及びその性格を考察したのであるが、結局、緯書においては、黃帝の道德的、政治的優越性を主張するのではなく、超越的力を借りて彼の神格化、を試みたものである。併し古代文獻を踏襲した傳説及び枝葉的屬性

を除くと 豊富な資料を持ちながら、殆ど黃帝の特異性は認め難く、他帝王も同一次元で扱われ、同様に神格化されている。緯書は、むしろかくして、帝統を顯示することが目的であつたようである。では何故その必要があつたか。こゝに問題となるのは、緯書中の漢王朝、劉氏の位置である。これは別に詳論し度いが、その資料は極めて多く、一例を示すと、

卯金刀為劉、中國東南出荊州、赤帝後、次代周。(春秋演孔図、後漢書地理傳注引)

卯金刀帝出、復堯之常、(中候・公羊疏引)とあり、漢王朝出現の必然を相生的五德説により論じている。かく漢王朝存立の基礎、又は劉氏権力の根源を、超越的力に求めることこそ緯書の意図する所であり、この徹底を期する為、漢を基底として帝統論(緯書以前の帝統論)の体系を作り、これを相生的五德説と、それを助ける種々の範疇とによつて、理論附けたのであろう。(終)

(因にこの小論は昭和二十七年年度の文部省科学研究費による助成研究成果の一部である)

註(一) 陳槃氏「戰國秦漢方士考論」(歴史語言集刊十七本)参照。

(二) この回数には問題があるが、今は、緯書を収録せる緯攷・緯書・七緯・古微書・玉函山房輯佚書・古経解義函・漢学堂叢書・説郭・尚書中候疏証・漢碑引緯巧及び以上に収録せられず、彼の地に佚し、我が国に伝存した中国文獻又は我が国の文獻に残存せる緯書の断片中より拾集し、明らかに同一と思われるものを除外し他は数に加えた。

(三) 感生説に就いては、左の論文に詳しく述べられているので、こゝでは要点のみを記す。

陳志良氏「始祖誕生与図騰主義」(説文月刊二〇二)
星野恒氏「支那天子の名義と古代の祭天」(史学雜誌十六ノ一)
白鳥清氏「殷周感生伝説の解釈」(東洋学報十六ノ一)

出石誠彦氏「上代支那の異常出生説話について」(民族四ノ二)等。

(四) 關一多氏「離騷解話」(關一多全集二)参照。

(五) (三)参照。

(六) 史記以外に春秋繁露・魯詩にも契・后稷の感生帝説が存する。

(七) 加藤常賢氏「殷尚子姓考」(東洋の文化と社会第一輯)参照。

(八) 森三樹三郎氏「支那古代神話、帝王感生伝説」参照。

(九) 帝嚳には路史に「履大跡而傷生嚳」とあり、讎書の文ではないかと思われる。

(一〇) 中村璋八「讎書に現われた五徳終始」(中国文化研究会論文集

二ノ四)参照。

(一一) 右同。

僧中嚴の道物論

——本稿は中嚴の學術が多種多様に亘り、「道物論」が其の學的体系の基盤をなして居る事を明らかにせんとするものである——

五山禪林の巨擘、一代の学僧と稱せられた中嚴の學術は、誠に該博精到そのものであつた。但その場合、彼の學は既往論者の言ふ如く、決して単に古學とか、易學とか、或は老莊とか、程朱等と、一部に限られたものではなかつた。此の意味に於て、北村澤吉博士が、

円月の學は、古來諸種の學説を据撫して、能く之を總合統一し、終に儒仏の調和融合に歸したる者也(五山文學史稿)(註1)

と言つて居られるのには、私も全面的に贊成する。所が、同博士も後に至つて、恰もこれに矛盾する如き言説を吐いて居られるのは、首肯

(一二) 出石誠彦氏「竜の由来について」(東洋學報十七ノ二)参照。

(一三) 同氏「漢代の祥瑞思想に関する二考察」(東洋思想研究二)参照。

(一四) 右同。

(一五) 陳槃氏「秦漢間之所謂符應論略」(集刊十六本)参照。

(一六) 右同。

(一七) 顧頡剛・揚向奎氏「三皇考・河図与洛書」(燕京學報專号之八)

(一八) 陳槃氏は「論早期讎緯及其与鄒衍書之關係」(集刊二十一本)

において河図・洛書を二種に分類している。

(一九) 陳槃氏「讎緯積名」(集刊十一本)

同氏「讎緯命名及其相關之諸問題」(同二十一本一分)参照。

古澤未知男

出来ない。例へば「寧ろ老莊を退け孔孟を推重」「殆ど易の外に出る事なし」「程朱學は推重の迹なく寧ろ之に反対の立場を取つた」等の如きがそれである。(註2) 其外、岡田正之博士は、先づ中嚴の孔子推尊を挙げ、次いで彼の中嚴思想が宋學の影響であるとなし、それと共に又「莊子をも嗜んだ」と言つて居られる。(日本漢文學史)(註3) 又足利衍述氏は、中嚴は「儒學に精深、殊に程朱學に於て、其の奥を究めた」となし、彼の學説が總て皆程朱に基くものとして居られる。

(鎌倉室町時代の儒教)(註4)が、私見を以てすれば何れも其の一斑を窺つて全貌を得ないものと言はなければならぬ。いま之についての論証は省略するが、要するに、彼の學術思想には、孔孟子思・老莊